【資 料】

現代大学生の友人関係とアイデンティティ形成との関連の検討

川俣 理恵*　　河村 茂雄**

本研究は，現代大学生にみられる友人関係の類型を見出し，アイデンティティを形成する際の重要な要素である危機と自己投入との関連について検討することを目的とした。A 大学の 1～4 年生 301 名を対象とし，友人関係尺度の因子分析により「内面的—表面的関係」「仲間への気遣い」の 2 つの下位因子を抽出し，それらを組み合わせて，現代大学生の友人関係を 4 つの類型に分類した。友人関係の類型とアイデンティティ形成の重要な要素である危機と自己投入との関連を検討した。結果，内面的で仲間への気遣いをしない本音の相互交流ができる友人関係が現在の自己投入に関連していた。また，女子においては，内面的な関係をもちながら仲間への気遣いをする友人関係も現在の自己投入に関連していた。

キーワード：現代大学生，友人関係，アイデンティティ形成

【問題と目的】

従来の青年期研究においては，親からの心理的離乳に伴い，同性の親しい友人との間で互いに人格的影響を及ぼし合う（岩永，1991），将来や進路選択，そして同性・異性の友人関係の悩みを分かち合う（吉岡，2001）といった親密な関わりが，青年期の友人関係の特徴として記述されてきた。そして，青年期の友人関係は，青年の社会化を果たすための①安定化の機能，②社会的スキルの学習，③モデル機能を有し（松井，1990），また，青年が自分づくりを行う際の①友だちとの同一視による自分づくり，②友だちとの役割演技による自分づくり，③友達からの反応による自分づくりという重要な役割を担うことが指摘されている（榎本，1995）。つまり，従来の青年期の特徴である親密で深い関係は，青年の社会化や自分づくりといった心理社会的発達を支え，促すと考えられる。

それに対して，現代青年においては，“友人関係の希薄化”がその特徴として指摘されており（松井，1990），表面的な親密さや楽しさを求める傾向（岡田，1993；上野・上瀬・松井・福富，1994），関係が深まることを恐れ回避する傾向（岡田，1993）や，傷つくことを恐れ友人を気遣う傾向（岡田，1995）などが共通して指摘されている。つまり，現代大学生の友人関係の様相には自己防衛的な面がみられ，従来の青年期の友人関係の様相だけでは捉えきれなくなっていると考えられる。

このような現代大学生の自己防衛的な友人関係は，①ギャング・グループの消失，②チャム・グループの肥大化，③ピア・グループの遷延化といった仲間関係の変質（希薄化）として捉えられ（保坂，1998），従来の対人恐怖とは異なり，より未熟な発達段階にとどまっている可能性が指摘されている（岡田，2002）。そして，この傾向は自己のアイデンティティ形成にも影響を及ぼし，アイデンティティの様態と友人関係との関連や，友人との活動や集団活動への積極的な関与との関連が明らかにされている（宮下・渡辺，1992；宮下・大野，1997；宮下，1998；石谷，1994；近田，1984）。つまり，従来型の親密で深い関係の形成が困難になってきた現代青年においては、友人関係に積極的関与するに至らない者もおり，アイデンティティ形成も困難な状況に至ることが推察される。このことは青年期の発達課題である職業選択にも影響を与え，大学入学後に職業決定を積極的に延期し，その延期した期間に思春期の発達課題である自由な役割実験を行う学生も見られる（下山，1992）と指摘されており，現

* 都留文科大学地域交流研究センター

** 早稲田大学 教育・総合科学学術院

代青年にみられる友人関係は，アイデンティティ形成以前の積み残した発達課題をやり直す大学生の友人関係を示すものである可能性も考えられる。

Erikson（1959）は，アイデンティティ拡散の状態の1つの要素として，他者との関係を避けたり，自己の考えを表明できないという，対人的かかわりあいの拒否と孤立の状態をあげている。金子（1995）は，「同調的」な他者関係や「隔絶的」な他者関係がアイデンティティ拡散の感覚と関連していることを明らかにしている。これらのことから，友人関係のもち方によりアイデンティティ拡散の様態を示す可能性が考えられる。

Erikson の理論をもとに，Marcia（1966）は，アイデンティティの形成の重要な要素である危機と自己投入という2次元からアイデンティティの状態を測定することを試みた。そして，Waterman（1993）は，青年期において重要な他者（significant others）が青年の人生の選択の幅を広げ，アイデンティティの探求の際の自己投入（commitment）に，より重要な意味づけを与えることを指摘した。つまり，青年期の重要な他者である友人関係とアイデンティティの探求の際の自己投入には，関連がみられると考えられ，アイデンティティの形成の重要な要素である危機と自己投入という側面から友人関係とアイデンティティ形成との関連を検討できると考えられる。

したがって，本研究では，現代大学生にみられる友人関係の類型を見出し，アイデンティティ形成に重要な危機と自己投入との関連から，現代大学生の友人関係とアイデンティティとの関連について検討することを目的とする。

【方 法】

調査対象 A 大学の学生 1～4 年生 301 名（男子 82 名，女子 217 名）を対象とした。

調査時期 200X 年 7 月。

調査内容 調査対象の大学生に自我同一性地位判定尺度（加藤，1983），友人関係尺度（岡田，1999）を実施した。

自我同一性地位判定尺度は，アイデンティティの確立の様相について，Marcia（1966）の概念をもとに現在の自己投入，過去の危機，将来の自己投入への希求の3水準の有無から各個人の全体的なアイデンティティの状態を捉え，自我同一性地位を判別するものである。なお，本研究では3下位尺度の合計得点の平均値と標準偏差を求め，下位尺度の得点が高いほどそれぞれの水準の経験についての認知が高いと考えた。評定は「全然そうではない（1点）」から「全くそのとおりだ（6点）」までの6件法である。

友人関係尺度は，岡田（1999）が現代青年に特徴的な友人関係に関する項目を補足修正した 23 項目のうち，「内面的ー表面的関係」，「群れ関係」，「気遣い関係」についての項目からなる 15 項目を使用し，普段付き合っている仲間の中で最も仲のよい友達を想定させ回答を求めた。評定は「全くあてはまらない（1 点）」から「非常にあてはまる（6 点）」までの6件法である。

手続き 各尺度からなる質問紙を講義時間中に配布し，一斉に実施した。実施に当たっては，フェイスシートに使用目的とデータの処理方法を明記して個人のプライバシーは守られることを確認し，倫理的配慮を行った。

【結 果】

現代大学生の友人関係の類型化

友人関係尺度の集計結果に因子分析（主因子法，バリマックス回転）を実施した。結果，固有値が1以上の因子を2つ抽出し，第1因子は友人との内面的な関係を指すため「内面的ー表面的関係因子」，第 2 因子は友人や仲間に対して互いに傷つけ合わないよう過剰に気遣うことを指すため「仲間への気遣い因子」とした（**Table 1**）。その際，負荷量の低かった5項目を削除した。全10項目に対し Cronbach の α 係数を求めたところ，第1因子においては.824，第2因子においては.661 であり，第2因子についてはやや低いが，分析に耐えうる内的整合性を保持していると判断し下位尺度とした。

次に，調査対象の学生の2つの因子ごとの合計得点を集計し相関係数を算出したところ，弱い正の相関があった（r＝.082）。そのため2つの因子の得点は独立していると考えたことから，得点を組み合わせ，学生の友人関係を 4 つの類型に分類した（**Figure 1**）。2つの因子の得点が全体平均値より高い（≧22,≧20）群は，内面的な関係をもつ従来の友人関係の特徴と仲

Table 1　友人関係尺度の因子分析結果

項　目	内面的－表面的関係	仲間への気遣い
友達に心を打ち明ける	.83	.21
友達に悩みごとを相談する	.81	.19
友達と真剣な議論をする	.75	.20
友達関係は浅い付き合いにとどめる ＊	.74	.16
友達とは，あたりさわりのない会話が中心だ ＊	.69	.29
仲間関係の中で互いに傷つけないよう気をつかう	－.22	.70
友達の考えていることに気をつかう	.14	.67
仲間から「つまらない人間」と思われないように気をつける	－.06	.67
自分を犠牲にしても友達につくす	.05	.59
仲間にウケるようなことをする	.20	.55
固有値	3.09	2.26
変動率（%）	.31	.22

＊は逆転項目

間への気遣いをする現代青年の友人関係の特徴を併せもつ群であることから，「折衷型」と命名した。内面的－表面的関係因子の得点が全体平均値より高く（≧22），仲間への気遣い因子の得点が全体平均値より低い（<20）群は，内面的な関係をもち，仲間への気遣いはしない従来の友人関係の特徴をもつ群であることから，「従来型」と命名した。内面的－表面的関係因子の得点が全体平均値より低く（<22），仲間への気遣い因子の得点が全体平均値より高い（≧20）群は，表面的な関係をもち，仲間への気遣いをする群であることから，「現代型」の友人関係の特徴のうち傷つかないための気遣いを行う側面が強い「気遣い型」と命名した。2つの因子の得点が全体平均値より低い（<22,<20）群は，表面的な関係をもち，仲間への気遣いはしない群であることから，「現代型」の友人関係の特徴のうち関係回避を行う側面が強い「回避型」と命名した。男女別の友人関係の4群における各因子の平均値については，**Figure 2**，3に示した。

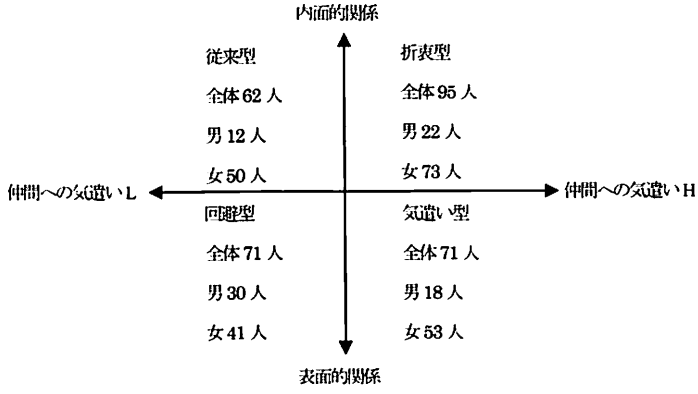

Figure 1　友人関係の4類型の人数構成

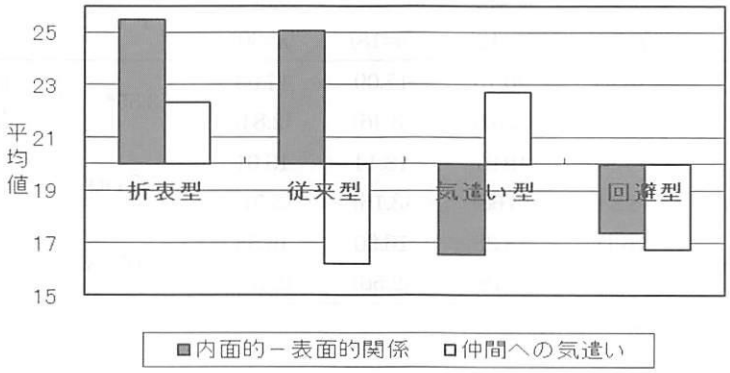

Figure 2　友人関係の４群における各因子の平均値（男子学生）

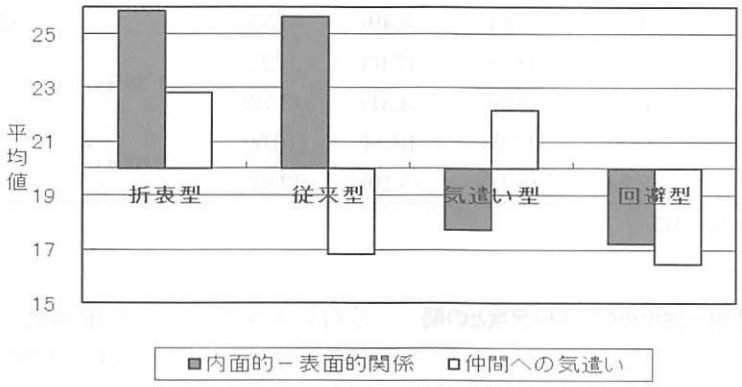

Figure 3　友人関係の４群における各因子の平均値（女子学生）

Table 2　男女別の友人関係尺度の各因子の平均値と標準偏差

	男子 (n=82)	女子 (n=217)	t 値
内面的－表面的関係	20.45 (5.30)	22.21 (4.99)	2.69**
仲間への気遣い	19.46 (3.81)	19.76 (3.80)	.61 *n.s*

（ ）内は標準偏差.　**p<.01.

Table 3 友人関係の類型ごとの自我同一性地位尺度の3因子の平均値と標準偏差（男子学生）

	折衷型 (n=22)	従来型 (n=12)	気遣い型 (n=18)	回避型 (n=30)	F値	多重比較 (5%水準)
現在の自己投入	16.94 (3.57)	20.15 (2.51)	17.09 (3.46)	17.03 (2.84)	3.55*	従来>折衷, 気遣い, 回避
過去の危機	17.94 (3.28)	19.07 (3.68)	18.14 (3.16)	16.61 (3.51)	1.74 *n.s.*	
将来の自己投入への希求	16.11 (2.61)	18.38 (2.18)	16.90 (2.56)	16.53 (2.87)	2.07 *n.s.*	

( ) 内は標準偏差. *p<.05.

Table 4 友人関係の類型ごとの自我同一性地位尺度の3因子の平均値と標準偏差（女子学生）

	折衷型 (n=73)	従来型 (n=50)	気遣い型 (n=53)	回避型 (n=41)	F値	多重比較 (5%水準)
現在の自己投入	16.90 (4.41)	16.42 (3.84)	15.23 (3.49)	14.65 (3.55)	3.70*	折衷>気遣い, 回避 従来>回避
過去の危機	18.65 (3.52)	18.38 (3.20)	17.63 (3.31)	17.52 (3.72)	1.38 *n.s.*	
将来の自己投入への希求	17.45 (2.99)	17.26 (3.11)	16.34 (3.10)	16.09 (2.67)	2.62 *n.s.*	

( ) 内は標準偏差. *p<.05.

友人関係の類型と自我同一性地位の3下位尺度との関連

友人関係についての先行研究から，青年期の友人関係には性差がみられることが明らかとなっている。本研究においても友人関係尺度の2因子について男女の平均値の得点を比較したところ，「内面的ー表面的関係因子」において男女に差がみられたため（t=2.69, p<.01），以下の分析は男女別に行った（**Table 2**）。友人関係の類型と自我同一性地位判定尺度の3下位尺度との関連を検討するために，友人関係の類型を独立変数，自我同一性地位判定尺度の3下位尺度を従属変数にして分散分析を行った（**Table 3, 4**）。結果，男女とも「現在の自己投入」のみに有意差がみられた（男子：F (3, 74) =3.55, p<.05, 女子：F (3, 208) =3.71, p<.05)。フィッシャーPLSD法による多重比較の結果，男子では「従来型」>「折衷型」=「気遣い型」=「回避型」，女子では「折衷型」>「気遣い型」=「回避型」，「従来型」>「回避型」であった。このことから，男子は「従来型」，女子は「従来型」「折衷型」の「現在の自己投入」の得点が高いことが明らかとなった。

【考 察】

友人関係の類型化によって見出された各群の特徴，分散分析によるアイデンティティとの関連について，友人関係の類型ごとに以下に整理する。なお，アイデンティティとの関連においては，危機との関連はみられず，自己投入との関連がみられることが明らかとなったため，自己投入との関連について各類型の様相をまとめることとする。

友人関係の4群の特徴

(1) 折衷型

内面的な関係をもちながらも仲間への気遣いをする群である。「友達に心を打ち明ける」「友達に悩みごとを相談する」といった項目の得点に加え，「仲間関係の中で互いに傷つけないよう気をつかう」「友達の考え

ていることに気をつかう」といった項目の得点が高く，友人との本音の交流を求めていながら，傷つけ合うことを恐れる自己防衛的な側面をもつ群であると考えられる。つまり，「折衷型」は従来に青年期にみられるとされた親密な友人関係（岩永，1991；吉岡，2001）と現代青年の特徴である傷つくことを恐れ友人に気を遣う傾向（岡田，1995）とを併せもつ群であると考えられる。

また，この群では，女子においてのみ，現在の自己投入との関わりが高いことが認められた。つまり，この群にみられる関係をもつことは，女子において積極的な自己投入に向かうことにつながる可能性が明らかとなった。

(2) 従来型

内面的な関係をもち，仲間への気遣いはしない群である。「友達に心を打ち明ける」「友達に悩みごとを相談する」といった項目の得点が高く，「仲間関係の中で互いに傷つけないよう気をつかう」「友達の考えていることに気をつかう」といった項目の得点は低いというように，友人との本音の交流を求め，互いに傷つけあうことがあっても，それを恐れずに，お互いの異質性も認め合うような関係（保坂，1998）をもつ群であると考えられる。つまり，「従来型」は従来から青年期後期の友人関係の特徴とされてきた親密で深い関係もつ群であると考えられる。

また，この群では，男女ともに現在の自己投入との関わりが高いことが認められた。つまり，この群にみられる関係をもつことは，男女ともに積極的な自己投入に向かうことにつながる可能性が明らかとなった。

(3) 気遣い型

表面的な関係をもち，仲間への気遣いをする群である。「友達に心を打ち明ける」「友達に悩みごとを相談する」といった項目の得点が低く，「仲間関係の中で互いに傷つけないよう気をつかう」「友達の考えていることに気をつかう」といった項目の得点が高いというように，友人との関係の深まりを避け，表面的な関わりをもち，お互いが傷つけあわないような一定の心理的距離を保つ気遣いをする群であると考えられる。つまり，気遣い型は，内面的な関係を避け，仲間に対して気遣いをすることで，自分が傷つかない距離を保つ（岡田，1995），現代青年の友人関係の特徴の中でも気遣い型の友人関係をもつ群である考えられる。

また，この群では，男女ともに現在の自己投入との関わりが他の群に比べて低いことが認められた。つまり，この群にみられる関係をもつことは，男女ともに積極的な自己投入に向かうことにはつながらない可能性が明らかとなった。

(4) 回避型

表面的な関係をもち，仲間への気遣いもしない群である。「友達に心を打ち明ける」「友達に悩みごとを相談する」といった項目の得点が低く，「仲間関係の中で互いに傷つけないよう気をつかう」「友達の考えていることに気をつかう」といった項目の得点も低いというように，友人との関係の深まりを避け，表面的な関わりをもち，お互いに傷つけあうような気遣いはしない群であると考えられる。つまり，回避型は，友人との関係の深まりを恐れ，関わり自体を避ける（岡田，1993）現代青年の特徴の中でも関係回避型の友人関係をもつ群である考えられる。

また，この群では，男女ともに現在の自己投入との関わりが他の群に比べて低いことが認められた。つまり，この群にみられる関係をもつことは，「気遣い型」同様，男女ともに積極的な自己投入に向かうことにはつながらない可能性が明らかとなった。

アイデンティティ形成に関わる友人関係

現代大学生の友人関係を類型化し，アイデンティティ形成との関連を検討した結果，先行研究同様，本音の感情交流ができる「従来型」の友人関係がアイデンティティ形成に関わる「現在の自己投入」と関連していた。友人との内面的なかかわりがアイデンティティの統合と関連する（宮下・渡辺，1992），アイデンティティ達成地位の者が，相互的で本音の交流を求める対人関係性やポジティブな刺激の親和動機を持つ（石谷，1992；武蔵・河村，2003）という先行研究の知見を支持するものと考えられる。

女子においては「折衷型」の友人関係をもつ学生の「現在の自己投入」の水準も高かった。長沼・落合（1998）は，嫌われないように気をつかっているつきあい方，好かれていたいなどの被愛願望がその背景にあるつきあい方は女子に多くみられることを明らかにしている。つまり，女子においては，気を遣うことが，友人との関係を円滑にする上で，必要な要素となっている可能性が考えられる。さらに，岡田（1993）は従来型と現代型の特徴を合わせもつ“やさしさ志向的

関わり方”を見出し，①従来型の青年においても防衛的友人関係の側面が顕在化しつつある，②互いを別個の人格として認めあった上での親密さをこの群が発達させているとする2つの解釈を述べている。つまり，女子においては，気を遣うことが，友人との関係を円滑にする上で，必要な要素となる可能性があり，「折衷型」では互いを別個の人格として認めあった上での親密さを発達させている可能性が考えられる。

本研究では，友人関係の類型化によって見出された各群の特徴，分散分析によるアイデンティティとの関連について整理した。この類型を詳細に検討するためには，各群の交友関係の特徴を詳細に検討することが求められるだろう。今後の課題としたい。

【引用文献】

榎本博明 1995 友人関係の意義と破綻 現代のエスプリ，330，55-64.

Erikson，E.H. 1959 Identity and the life cycle. Psychological Issues， NO．1． *New York : International Universities Press.*（小此木啓吾訳編 1973 自我同一性―アイデンティティとライフ・サイクル― 誠信書房）

保坂 亨 1998 児童期・思春期の発達 下山晴彦（編）教育心理学Ⅱ―発達と臨床援助の心理学 東京大学出版会 103-123.

石谷真一 1994 男子大学生における同一性形成と対人関係性 教育心理学研究，42，118-128.

岩永 誠 1991 友人・異性との関係 今泉信人・南博文（編）人生周期の中の心理学 北大路書房 140-152.

金子俊子 1995 青年期における他者との関係のしかたと自己同一性 発達心理学研究，6，41-47.

加藤 厚 1983 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究，31，20-30.

近田輝行 1984 自我同一性と親密性 ―後期青年の同輩集団と自己確立をめぐって― 立教大学心理学科研究年報，26，36-46.

Marcia，J.E. 1966 Development and validation of ego identity status. *Journal of abnormal and social psychology*，3，551-558.

松井 豊 1990 友人関係の機能 （斎藤耕二・菊池章夫（編） 社会化の心理学ハンドブック） 川島書店 283-294.

宮下一博 1998 青年の集団活動への関わり及び友人関係とアイデンティティ発達との関連 千葉大学教育学部研究紀要 46，27-34.

宮下一博・大野朝子 1997 青年の集団活動への参加とアイデンティティ 千葉大学教育学部研究紀要 45，7-14.

宮下一博・渡辺朝子 1992 青年期における自我同一性と友人関係 千葉大学教育学部研究紀要，40，107-111.

武蔵由佳・河村茂雄 2003 大学生における親和動機の下位動機の階層性の検討―発達を促進するための構成的グループ・エンカウンターを活用した援助のあり方― カウンセリング研究，36，10-19.

長沼恭子・落合良行 1998 同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係 青年心理学研究，10，35-47.

岡田 努 1993 現代青年の友人関係に関する考察 青年心理学研究，5，43-55.

岡田 努 1995 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究，43，354-363.

岡田 努 1999 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について 教育心理学研究，47，432-439.

岡田 努 2002 現代大学生の「ふれあい恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察 性格心理学研究，10，69-84.

下山晴彦 1992 大学生のモラトリアムの下位分類の研究―アイデンティティの発達との関連で― 教育心理学研究，40，121-129.

上野行良・上瀬由美子・松井 豊・福富 護 1994 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究，42，21-28.

Waterman，A.S. 1993 Developmental perspectives on identity formation: from adolescence to adulthood. In Marcia，J.E，Waterman，A.S，Matterson，D.R， Archer，S.L. & J. L. Orlofsky (Eds.) *Ego identity :a handbook for psychosocial reseach.* New York : Springer-Verlag. 42-68.

吉岡和子 2001 友人関係の理想と現実のズレ及び自己受容から捉えた友人関係の満足感 青年心理学研究, 13, 13-30.

(2011年8月29日 受稿, 2012年1月16日 受理)

The Relationship between Friendships and Identity Development in University Students

Rie Kawamata (Tsuru University), Shigeo Kawamura (Waseda University)

This study examines the nature of friendships among university students today and their relationships with "personal crises" and "commitment to something to interest" which are important factors for identity development. In this study, 301 students from first to fourth years attending university A were targeted. Factor analysis with a "friendships scale" revealed two factors, "depth of relationships" and "worry about hurting friends." Then the friendships were classified into four types, combining the two factor scores. An analysis of variance was conducted to examine the relationships of type of friendship with crises and the commitment. The results showed that the friendships who has "deep relationship" and "not to worry about hurting one's friends" related to commitment. In the case of women, the type of friendships involving a deep relationship and worry about hurting one's friends related to commitment, too. But the friendships type didn't relate to crises.

Key Words: university students, friendships, identity development